館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第21集

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI-SHINAI

1989

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI-SHINAI

1989

館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成元年度に実施した館林市内遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次の通りである。

教育長	堀越　亘		
教育次長	田村粋男		
担当主管	文化振興課　文化財係		
文化振興課長	坂本充弘		
文化財係長	三田正信		
学芸員	岡屋英治		
学芸員	岡屋紀子		
主事	黒沢文隆（担当）		
嘱託	藤坂和延（平成元年９月まで）		
作業員	石川栄吉	早野茂	林正行
	中井貞次	寺内義正	吉沢春男
	今井恵子	飯島富子	津田照子
	近藤久美子	岩本美智恵	小林江里

3. 調査にかかわる経費は、国・県からの補助を受け館林市が負担した。
4. 調査による出土遺物・調査記録・資料は館林市教育委員会にて保管してある。
5. 本書のとりまとめは、黒沢・藤坂が中心となり行った。
6. 調査ならびに本書の作成にあたり、群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県埋蔵文化財センター、東京都立大学峰岸純夫氏、福井県立朝倉氏遺跡資料館、館林市文化財調査委員青木信一氏・前沢正之氏のご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

目　　次

例　　言 …… Ⅰ

目　　次 …… Ⅱ

図　表　目　次 …… Ⅱ

写　真　目　次 …… Ⅲ

第Ⅰ章　館林市の環境 …… 1

第Ⅱ章　各遺跡の調査 …… 9

　第1節　岡野・屋敷前・岡遺跡 …… 9

　第2節　中山東遺跡 …… 12

　第3節　館林城跡 …… 15

図　表　目　次

第1図　館林市の地形 …… 2

第2図　住居址が検出された遺跡 …… 7

第3図　邑楽・館林台地北縁の遺跡 …… 10

第4図　岡野・屋敷前・岡遺跡調査地現況図 …… 10

第5図　茂林寺沼周辺の遺跡 …… 13

第6図　中山東遺跡調査地現況図 …… 13

第7図　館林城・城下町地割概略図（江戸時代末期） …… 17

第8図　館林城跡調査地現況図 …… 20

第9図　土塁構造概略図 …… 21

第10図　共立モスリン時代の本丸跡地（トレースによる略図） …… 22

第11図　館林城跡遺構配置図 …… 22

第1表　館林城略年表 …… 17

写　真　目　次

写真1　内陸古砂丘の景観 …… 3

写真2　沖積低地の景観 …… 3

写真3　洪積台地を開析する谷の景観 …… 3

写真4　岡野・屋敷前・岡遺跡調査前の風景 …… 11

写真5　〃　調査風景 …… 11

写真6　〃　トレンチ全景 …… 11

写真7　中山東遺跡調査前の風景 …… 14

写真8　〃　調査風景 …… 14

写真9　〃　トレンチ全景 …… 14

写真10　館林城跡（本丸跡地）調査前の風景 …… 19

写真11　〃　調査風景① …… 20

写真12　〃　土塁トレンチ全景 …… 20

写真13　〃　調査風景② …… 21

写真14　〃　石組遺構Ⅰ …… 22

写真15　〃　石組遺構Ⅱ …… 22

第Ⅰ章　館林市の環境

位置と地形

館林市は群馬県の南東部に位置する。北は渡良瀬川を隔てて栃木県、東は邑楽郡板倉町を経て渡良瀬川遊水池で茨城県、南は邑楽郡明和村を経て利根川で埼玉県、西は邑楽郡邑楽町とそれぞれ接している。

市域は東西およそ15km、南北８kmの中に収まり、面積は60.97㎢である。県都前橋市への距離は約45km、所要時間は自動車で約２時間、首都東京へは東武鉄道で浅草まで65km、所要時間は急行で１時間余りである。

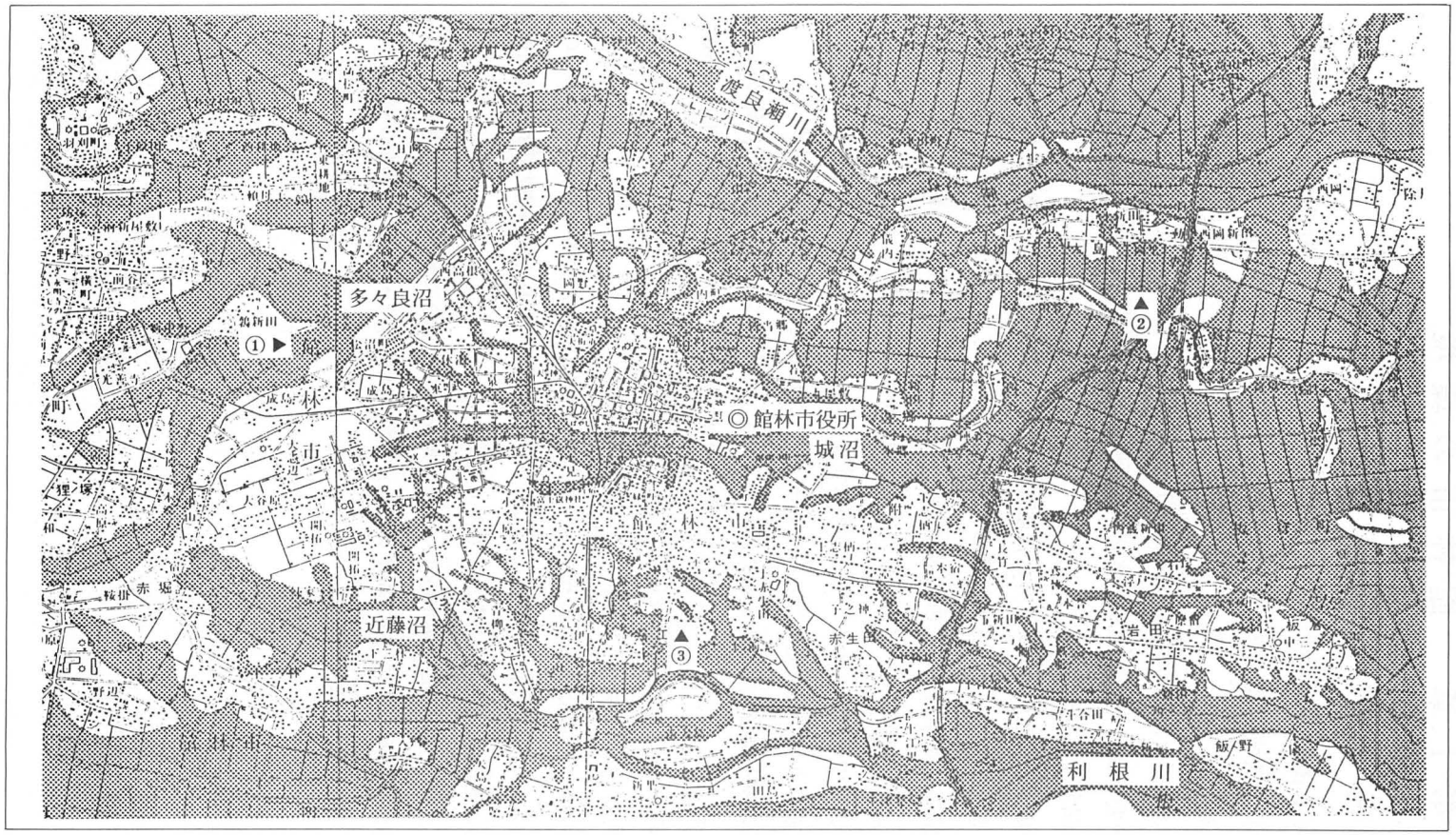
地形的には関東平野の北西部にあたり、台地（洪積台地・内陸古砂丘・自然堤防など）と低地（沖積低地・湿地・池沼・河川・旧河道など）に大別される。

館林市内中央部を占める台地は、邑楽郡大泉町から同郡板倉町まで延びる洪積台地で、『邑楽・館林台地』と呼ばれている。形成時期は下末吉海進時に遡るとされ、砂・礫・シルトなどの河川堆積物の上に中部ローム・上部ロームを載せている。台地は比較的平坦であるが西部から東部にかけて緩やかな傾斜を見せている。標高は18～25ｍ程度である。

洪積台地西端の多々良沼を形成する低地帯の南岸には、洪積台地と比高＋５ｍ、幅約250ｍの内陸古砂丘が連なる。この古砂丘は『邑楽・館林台地』に沿うように邑楽郡大泉町古海から館林市高根町まで延びている。形成時期はやはり下末吉海進時と言われている河畔砂丘である。館林市の最高地点はこの古砂丘にある。

『邑楽・館林台地』を南北に挟むように、利根・渡良瀬の両大河が東流しており、館林市の沖積低地は、両大河に伴う大小河川の氾濫原である。低地中にみられる旧河道の窪地や微高地（自然堤防）は、河川の氾濫の歴史を示すものである。

台地上に落ちた雨水は、特定の集水域を中心に台地を開析し下流である沖積低地に流れ込む。こうして形成された開析谷の中には、城沼を始め近藤沼・茂林寺沼・東沼などの沼や湿地が形成されており、館林市の景観の特徴となっている。



第1図 館 林 市 の 地 形

時代別遺跡の状況

館林市内における遺跡分布調査はこれまで延べ４回行われている。すなわち戦前における『上毛古墳総覧』（昭和13年刊）に伴う調査、昭和30年代の『群馬県の遺跡』（昭和38年刊）に伴う調査、昭和45・46年実施の『群馬県遺跡台帳』（昭和46年刊＝以下旧台帳と記す。）に伴う調査、昭和58～63年にかけて実施した市内遺跡詳細分布調査（『館林市の遺跡』として昭和63年刊）の４回である。

《上毛古墳総覧》

昭和10年群馬県下一斉の古墳の調査結果をまとめたもので、館林町－１、郷谷村－５、大島村－０、赤羽村－１、六郷村－０、三野谷村－１、渡瀬村－０、多々良村－59の計67基の古墳が存在したことが記録されている。但し、この記録からは現在地を比定することはできない。

《群馬県の遺跡》

昭和38年調査、館林市内では42の遺跡が掲載されている。内訳は、縄文－24、弥生－１、土師－８（内須恵・土師が１）、古墳（墳墓）－８、歴史－１となっている。

《群馬県遺跡台帳》＝（旧台帳）

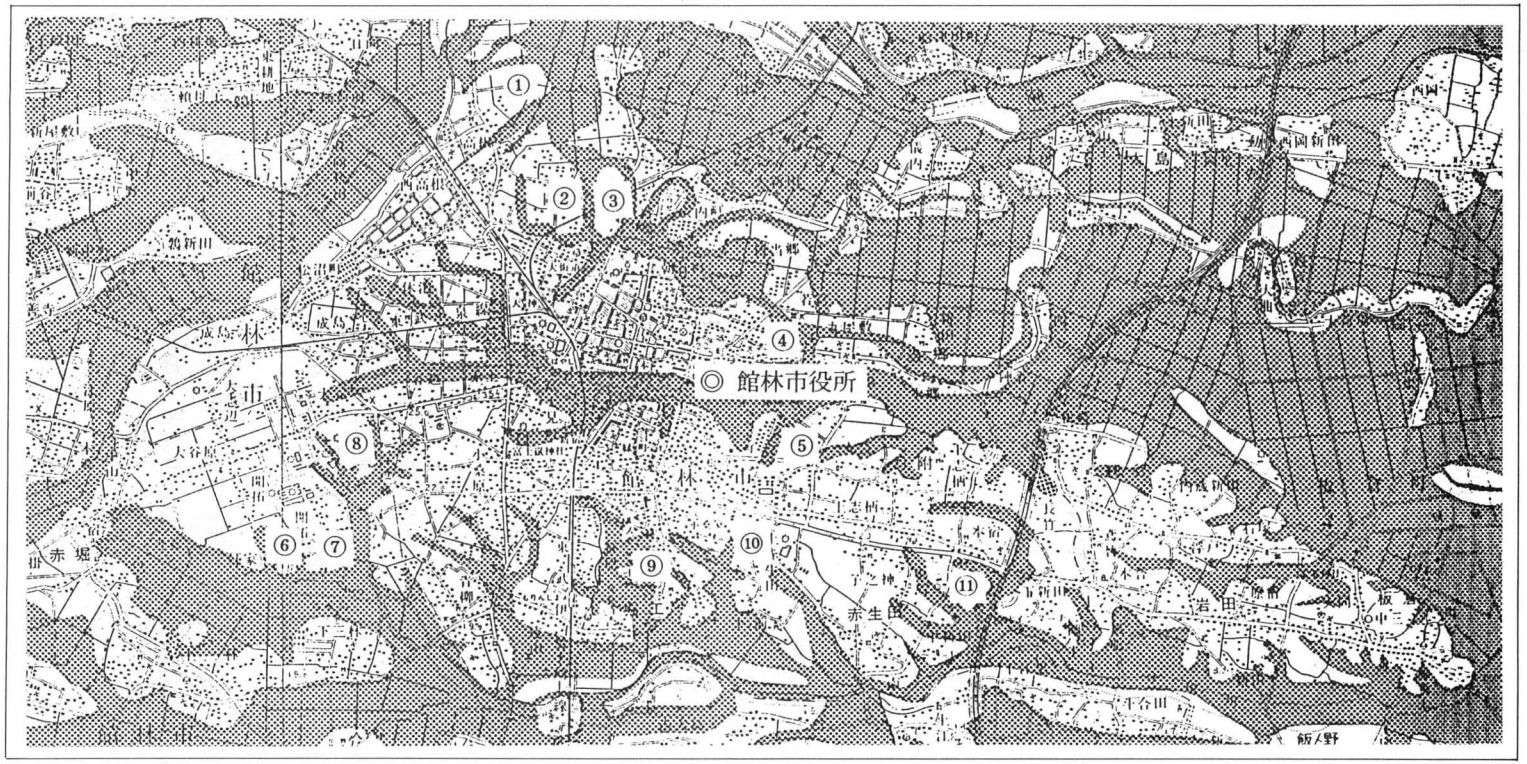
昭和46年調査、館林市内では46の遺跡が掲載されている。内訳は先土器－３、先土器・古墳の複合－１、先土器・縄文・古墳の複合－１、先土器・縄文・中世の複合－１、縄文－18、縄文・古墳の複合－６（善長寺付近遺跡は山王山古墳を含む）、縄文～平安の複合－１、古墳－７（墳墓が４、包蔵地が３）、古墳・中世の複合－１、中世－４、近世－３である。

《館林市の遺跡》

昭和58年度から５ケ年事業として実施した「市内遺跡詳細分布調査」により144の遺跡が推定されている。これは詳細な遺物マッピングで確認された700近い遺物散布地に立地条件を加味し推定したものである。

144遺跡の内訳は、旧石器時代－３、縄文時代（縄文時代の遺物のみ散布）－13、弥生時代－０、古墳時代から平安時代を含む遺跡－93（うち縄文時代の遺物が散布する遺跡－23）、古墳（墳墓）が推定を含め16（延25基）、中世生産址－１（多々良沼遺跡）、中世城館址－16（伝承地）、近世－２（館林城跡・近藤陣屋跡）である。

これらの遺跡はかって付近に人々の生活が営まれていた可能性を示すものであるが、遺物マッピングを中心とするものであるためその限界性は否めず、遺跡の確定のためには実際の発掘調査を待たなければならない。



第2図　住居址が検出された遺跡

①高根・外和田遺跡（古墳）
②岡野・屋敷前・岡遺跡（縄文）
③八方遺跡（古墳）
④尾曳町遺跡（古墳）
⑤大袋遺跡（縄文）
⑥南近藤遺跡（古墳・奈良）
⑦北近藤第一地点遺跡（古墳・平安）
⑧伝右エ門遺跡（古墳）
⑨下堀工道満遺跡（平安）
⑩間堀遺跡（縄文）
⑪道満遺跡（弥生・平安）

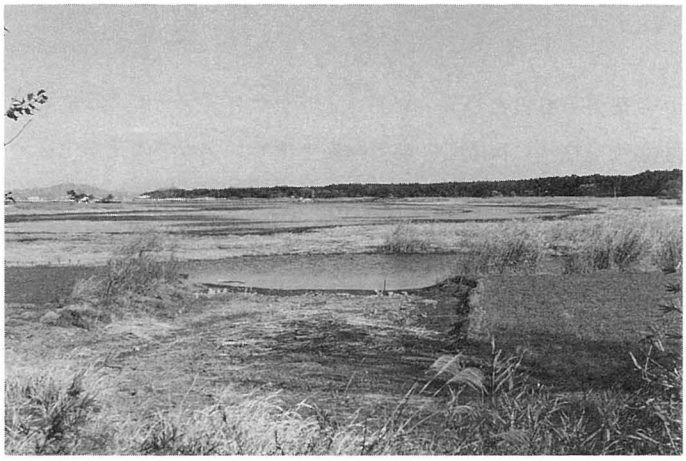


写真１　内陸古砂丘の
景観
（手前が多々良沼）

写真２　沖積低地の
景観
（大島地区）

写真３　洪積台地を開
析する谷の景観
（湿田となっている）

低地の環境変遷

環境の歴史的変遷を探るてがかりを得るものとして、シンウォールサンプラーによる試錐調査がある。この調査は低地中の堆積物を柱状に採取し、堆積物の土壌サンプル中の花粉化石・大型植物群・珪藻化石およびテフラなどを分析することで試錐地点の歴史的環境の変遷を推定しようとするものである。テフラなどを根拠としての実年代の比定もある程度可能なものとなるが、調査の対象地が比較的周囲の影響を受けない堆積層をなす湿地等に限定され、範囲も局地的なものであるという限界性は否めない。また、低地において推定された環境変遷を台地における土層との関係を明らかにできないことも遺跡分布調査に援用する際大きな課題となる。

館林市においては、昭和58年から60年にかけて茂林寺沼他の各池沼群、昭和62年に渡良瀬川の河川床および館林市内東北部の沖積低地においてそれぞれ調査が実施されており、これを基にした推定の結果を参考として下記に提示しておきたい。

3000年以前……低地は大規模な谷、河川は谷底を流れ一部に湿地が広がる。台地と低地の比高差は７ｍ以上と推定される。

3000年～2000年前……河川の水位が下がり、谷地の中の一部は乾燥したものと推定される。

2000年～1400年前……河川の水位が上がり、谷底は水域および湿地となる。堆積による埋没はこの時期と推定される。

1400年～1100年前……火山の噴火の影響で河川の氾濫が頻繁となり、谷が埋没して行く。館林市東北部の旧河道と自然堤防はこの時期に形成されたものと推定される。

時代別遺跡の発掘調査の概要

各時代の遺跡について、昭和55年より館林市教育委員会が実施した発掘調査の報告書（『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』以下『市埋文報告書』と記す。）その他により遺構が検出した遺跡を中心に概要を述べたい。

調査結果に見られる遺跡の保存状況は、台地の削平や低地の埋め立てによる地形の平坦化という現象を強く反映しており、概ね不良である。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は多々良沼を形成する低地帯南岸の内陸古砂丘上に分布するが遺構の検出された例は無い。国道354号付近の水溜第一地点・同第二地点遺跡では、ナイフ型石器・尖頭器他の石器が出土している（『館林双書第１巻』、『市埋文報告書第17集』）。その他城沼南岸の大袋Ⅱ遺跡では６ケ所の遺物（石器）集中地点が確認されている（『市埋文報告書第２集』）。

《縄文時代》

城沼南岸の大袋Ⅱ遺跡では、調査により早期の炉穴、前期・中期の住居址が検出されている（『市埋文報告書第２集』）。

蛇沼北岸の間堀遺跡においても、調査により前期・中期の住居址が検出されている（『市埋文報告書第５集』）。

後期の住居址の検出例は、「邑楽・館林台地」北縁の岡野・屋敷前・岡遺跡の調査で１軒見られる。この住居址は保存状況はきわめて劣悪なものであったが、出土遺物から後期中葉に比定されている（『市埋文報告書第６集』）。

晩期は遺構の検出例は無いが、蛇沼周辺の大原道東・上ノ前遺跡の調査などから中期から晩期にかけてのまとまった遺物が出土している（『市埋文報告書第３集』・『同12集』）。

《弥生時代》

時代別遺跡の状況で示されたように、館林市におけるこの時代の遺跡は極端に少ない。僅かに谷田川北岸の道満遺跡において、弥生時代から古墳時代の移行期に比定される住居址や方形周溝墓が検出されたのみである（『板倉町史』）。

《古墳時代》

古墳時代の遺跡は市内全域に広がり、発掘調査により住居址が検出したものに、八方・北近藤第一地点・伝右エ門・尾曳町などの遺跡がある。

前期（石田川期）の遺物が出土しているのは、城沼北岸の尾曳町遺跡の調査で検出された住居址である。しかし出土状況が床直でないため土器形式から遺構の時代決定はされていない（『市埋文報告書第10集』）。

近藤沼から北方に延びる開析谷の奥部を南東に臨む台地上に所在する伝右エ門遺跡の調査において検出された住居址も前期のものである。出土遺物の土器形式から石田川に継続する４世紀末から５世紀初頭のものに比定されている（『館林市誌歴史篇』、『群馬県史資料編２』）。

中期（和泉期）に比定される住居址が検出しているのは八方遺跡である。「邑楽・館林台地」の北縁、渡良瀬川水系の河川の氾濫原に突出した舌状台地に所在するこの遺跡の調査ではこれまでのべ10軒以上もの住居址が検出されている。そのうち１軒が中期に、その他は後期に比定されている（『旧台帳』、『八方遺跡発掘調査報告書』、『市埋文報告書第６集』・『同10集』・『同13集』・『同15集』）。また内陸古砂丘の東端部に所在する高根・外和田遺跡では、昭和41～42年にわたる調査で古墳時代の住居址４軒が検出されている。時期は和泉期より古いものである可能性がある（『館林双書第１巻』、『旧台帳』）。

八方遺跡の他に後期（鬼高期）に比定される住居址が検出されているのは、近藤沼北岸の北近藤第一地点・南近藤遺跡である。検出された住居址は両遺跡併せて30軒を越えている（『市

埋文報告書第６集』・『同17集』・『同20集』）。

古墳（墳墓）は、『上毛古墳総覧』で多々良村第４号墳に比定された天神二子古墳の発掘調査が行われており、粘土槨の内部構造と埴輪列の一部が検出されている（『館林市誌歴史篇』）。谷田川北岸の淵ノ上古墳の調査では周濠・埴輪列の他埋葬施設の存在が明らかにされている。埋葬施設は南に開口する横穴式石室で、玄室の平面形は３・５ｍ×２・４ｍ程の楕円型を呈し、長さ２・４ｍ程の羨道が取り付いていた。既に大規模な盗掘を受けており一部しか残っていなかったものの直刀・耳飾り・鉄鏃などの副葬品が出土した。石室の石材（榛名山噴出の角閃石安山岩）により６世紀後半の築造と推定されている。

《奈良時代》

この時代の遺跡で、発掘調査により遺構が確認された遺跡は少ない。前述の南近藤遺跡で検出された住居址のうち２軒が出土遺物により奈良時代に比定されているのみである（『市埋文報告書第20集』）。

《平安時代》

遺物マッピングでは広い範囲に散布する国分期の遺跡であるが、実際の発掘調査により遺跡の存在が裏付けられた例は道満遺跡と下堀工道満遺跡・北近藤第一地点遺跡等である。谷田川北岸道満遺跡の調査では前述の弥生時代から古墳時代への移行期の遺構の他に平安時代の住居址が検出されている（『板倉町史』）。茂林寺沼北岸の下堀工道満遺跡の調査で検出された住居址は、保存状況は劣悪であったが、少量の国分期の遺物が出土している。北近藤第一地点遺跡検出の多数の住居址の中には国分期の遺物の見られるものもある。

《中　　世》

鉱さいの散布により生産址とされる多々良沼遺跡と城館址16がこの時代の遺跡である。城館址は伝承地であり史実とのかかわりは不詳である。現存する遺構の性格を明らかにするような発掘調査も現在までのところ実施されていない。

《近　　世》

館林城跡は、「邑楽・館林台地」を開析する城沼・鶴生田川を形成する大きな谷の北側の台地を選地しており、近世における範囲は城廓部・侍屋敷・城下町を含めほぼ市街地にあたる。このため現在は殆どが住宅地となっており、遺構は館林市文化会館周辺（三ノ丸）や館林市立第一中学校周辺（総曲輪）などに部分的に土塁を遺すのみである。

発掘調査は、本丸や三ノ丸の一部について実施されているが、既に造成や近年の建築物が建てられており、試掘的な意味合いが強く、400年以上の歴史を持つ館林城の時間的推移に添って性格を言及するものではない（『館林双書第17巻』）。

第Ⅱ章　各遺跡の調査

第1節　岡野・屋敷前・岡遺跡（おかの・やしきまえ・おかいせき）

立地と環境

岡野・屋敷前・岡遺跡は館林市街地の北方、東武鉄道佐野線渡瀬駅の西方900ｍに位置する。

地形的には「邑楽・館林台地」の北縁にあたり、北を渡良瀬川水系の沖積低地（矢場川旧河道と推定されている）、南をこの低地から浸食する小さな谷（現況は排水路）に挟まれた台地上に立地している。この台地における遺跡は、『旧台帳』には、屋敷前遺跡（古墳時代包蔵地）・岡遺跡（縄文時代包蔵地）・岡野遺跡（縄文時代包蔵地）の3遺跡が掲載されていたが、ほぼ台地上全面に古墳時代から平安時代にかけての遺物の散布が見られるため、旧台帳に掲載されていた3遺跡を包括する範囲で遺跡地と推定されたものである。現況は山林・畑・宅地であるが、北部と南部の宅地化が進んでいる。

既往調査は遺跡地南部において昭和57年に個人開発に伴う発掘調査が実施されており、縄文時代後期に比定されている住居址1軒が検出されている。

邑楽・館林台地北縁の遺跡

矢場川の旧河道と推定される低地に臨む「邑楽・館林台地」北部には本遺跡（1）の他に、高根・外和田遺跡（2）・大道北遺跡（3）・八方遺跡（4）・大街道遺跡（5）・朝日町遺跡（6）・新倉前遺跡（7）などの遺跡が分布する。古墳としては高根古墳群・高根稲荷大明神古墳や台地を深く開析する谷に臨む愛宕神社古墳があり、中世城館址としては高根城・蛇屋敷の伝承地がある。縄文時代の遺物が散布するのは（1）・（2）・（5）・（6）の遺跡であり、散布の状況は薄い。発掘調査により遺構が検出されたのは本遺跡のみである。大街道遺跡からは縄文時代後期称名寺式の深鉢型の土器が出土している。

古墳時代の遺物が散布するのは（1）・（2）・（3）・（4）の遺跡であり、かなり広い範囲に広がる。発掘調査により遺構が検出されたのは八方遺跡と高根・外和田遺跡である。八方遺跡はまとまった住居址の検出により古墳時代後期を中心とする集落址であることが明らかにされている。高根・外和田遺跡は4軒の住居址が検出されたことで知られている。

奈良時代の遺物が散布するのは古墳時代と同じく（1）・（2）・（3）・（4）・（7）の遺跡である。これらの遺跡には平安時代の遺物散布も見られ、古墳時代から平安時代に継続する遺跡と推定されている。平安時代の遺物が散布するのは前述の4遺跡の他に大街道遺跡でも薄く見られる。

調　査　の　概　要

岡野・屋敷前・岡遺跡の調査は、地権者岡村新次郎氏の館林市岡野町560－18における個人開発に伴う事前確認調査である。

館林市教育委員会では、地権者より埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせのあった時点で協議を行うとともに現地確認を行った。

現地における遺物の散布は多くないが、ボーリングステッキで調べたところ、表土が厚い状況が窺えたため、試掘溝などにより事前確認調査を行い地下の状況を把握することが望ましいと判断された。

地権者との再協議の結果上記の調査を実施し、遺構が検出された場合本調査を実施するものとして了解された。

調査は開発予定区域内に3本の試掘溝（幅1ｍ）を掘り下げ地下の状況を確認した。

この結果遺構と思われる掘り込みは見られず、耕作地としてかなり深くまで造成されていることが判明した。遺物は総量でパンケース一箱近くになり、時代は縄文・古墳である。

写真4　岡野・屋敷前・岡遺跡調査前の風景

写真5　岡野・屋敷前・岡遺跡調査風景

写真6　岡野・屋敷前・岡遺跡トレンチ全景

第３図　邑楽・館林台地北縁の遺跡

第４図　岡野・屋敷前・岡遺跡調査地現況図

第２節　中山東遺跡（なかやまひがしいせき）

立　地　と　環　境

中山東遺跡は東武鉄道伊勢崎線茂林寺前駅の東方200ｍに位置する。

地形的には茂林寺沼を形成する開析谷の西へ延びる支谷（字間ノ谷）の南岸に立地している。遺跡地の標高はおよそ20ｍ弱で、低地との比高差は３ｍ近くになっている。

散布する遺物は平安時代のものであり、既往の発掘調査例は無い。

茂林寺沼周辺の遺跡

茂林寺沼を形成する開析谷に臨む洪積台地上には本遺跡（１）の他に、腰巻遺跡（２）・美園町遺跡（３）・笹原遺跡（４）・法正谷遺跡（５）・前通遺跡（６）・下堀工道満遺跡（７）などの遺跡が分布する。このうち腰巻遺跡は現在遺物散布は見られない。『旧台帳』では「縄文時代前期土器出土、散布資料は比較的少ない、大部分宅地化している。」と記されている。

縄文時代の遺物が散布するのは、（３）・（４）の遺跡である。このうち笹原遺跡では過去に２度の調査が行われており、地下の状況から既に一帯が大規模な土地改変が行われていることを窺わせている。

古墳時代の遺物が散布するのは、（７）の遺跡である。表採では平安時代の遺物の散布もみられる。過去の発掘調査による出土遺物は、縄文時代早期から後期、古墳時代後期から歴史時代というように多彩であるが、いずれも小破片である。竪穴式住居址１軒・掘立柱遺構などが検出されているが、調査結果にみる保存状況は極めて悪い。

その他（１）・（５）・（６）の遺跡において散布するのは平安時代の遺物のみであり、その散布状況は薄い。また既往の発掘調査例も無く、遺跡の性格を語るまでに至っていない。

調　査　の　概　要

中山東遺跡の発掘調査は、土地貸借者中里　實氏の館林市堀工町1624－64番地における個人開発に伴う事前確認調査である。

館林市教育委員会では、開発者より館林市農業委員会へ提出された転用申請の合議をうけた時点で協議を開始した。

申請地は中山東遺跡の推定地であり、隣地における遺物の散布はみられるものの該当地番における散布は見られない。

しかし、同遺跡における既往の発掘調査例が無いため、試掘溝などにより地下の状況の把握が望ましいものと判断された。

以上のことを踏まえ、この土地の取り扱いについては、事前に確認調査を実施し、その結果に基いて再協議をするものとされた。

調査は開発予定区域に任意の試掘溝（幅１ｍ）を設定し、地下の状況の把握を試みた。

この結果遺構と思われるような掘り込みは確認されなかった。地下の状況については、大きな土地改変の様子は見られず、台地そのものの保存状況は比較的良好と言える。

写真７　中山東遺跡調査前の風景

写真８　中山東遺跡調査風景

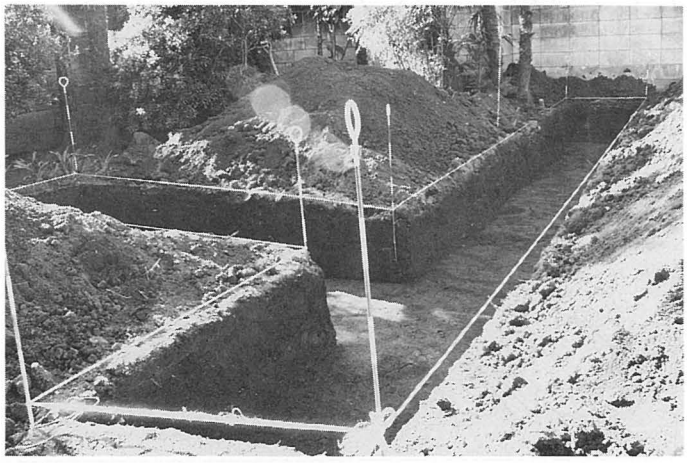
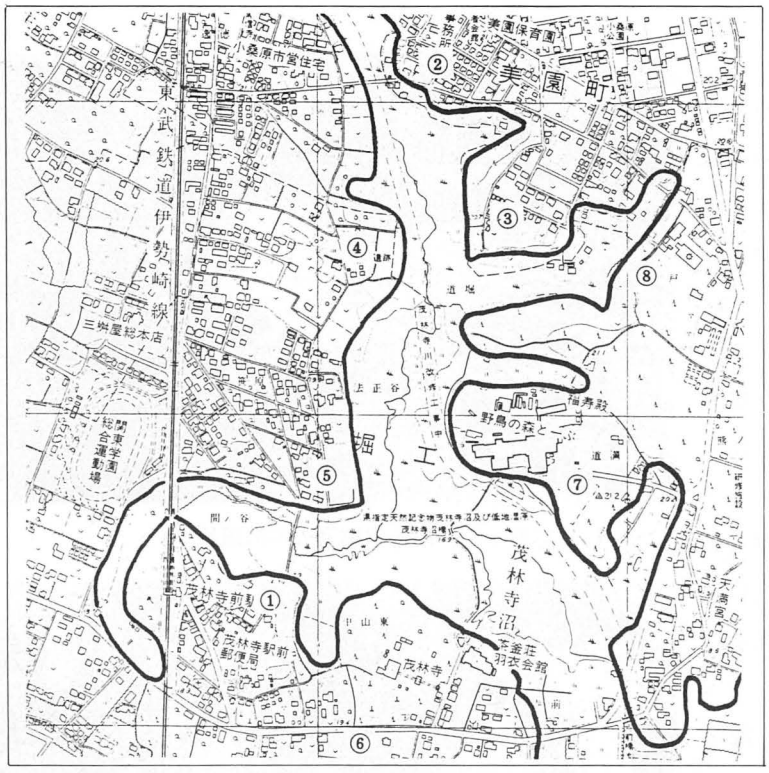
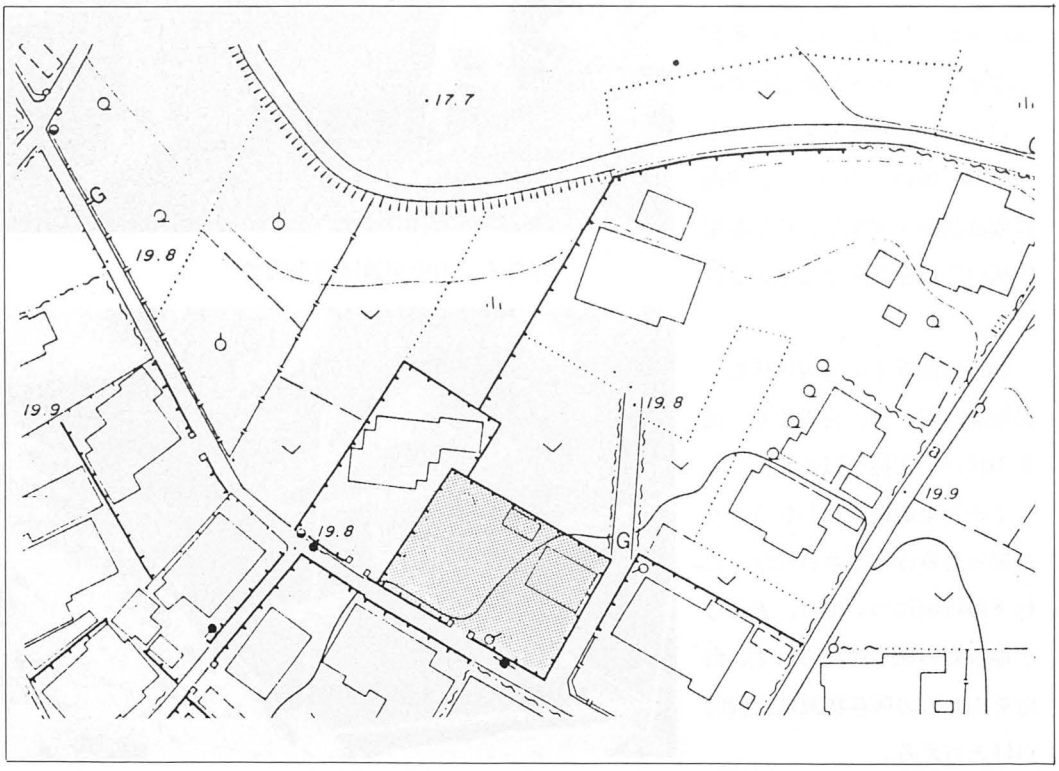


写真９　中山東遺跡トレンチ全景



第5図
茂林寺沼周辺の遺跡



第6図　中山東遺跡調査地現況図

第3節　館林城跡（たてばやしじょうせき）

館林城の概要

館林城は別名尾曳城と呼ばれ、城沼・鶴生田川を形成する開析谷の北岸、城沼に突き出す舌状台地を選地し築かれた平城である。中世には沼と湿地を巧みに利用した要害として著名であり、近世においては榊原氏以後廃藩を迎える明治まで中絶期を挟み松平氏（大給）・徳川氏・松平氏（越智）・太田氏・井上氏・秋元氏を城主とする藩政時代の拠点として栄えた。

《築　城》

伝承では天文元年（1532）在地豪族赤井氏により築かれたと言われている。

中世文書の中では伝承に先立つ15世紀後半に館林城にかかわる記述が見られ、文明年間の関東地方の争乱の中で「館林城」の名のある武装施設が存在していたことが推定されている。

《中世の城主と土木事業》

この時代の館林城主は3家6代と言われる。すなわち館林地方の既勢力の末裔と称する赤井氏4代、越後上杉氏の関東進出を背景に上野東部に勢力を伸ばした長尾氏1代、小田原北条氏上野制圧に伴い城主になった北条氏1代（氏規＝小田原城主北条氏直の弟）の3家である。土木事業については『館林記』などの古記録により、長尾氏の城廓の拡張・城下町の移転が言われている。長尾氏の支配は太田金山城主由良氏と連立する地域勢力であり、上杉（越後）・北条（相模）などの戦国大名の広範囲な勢力争いの中で戦略的面からの整備であったものとの見方もできる。「大谷休泊」に象徴される開発政策を推進したのもこの長尾氏であるが、同時代の史料による実証性に乏しく伝承の域をでていない。

《近世の城主と土木事業》

豊臣秀吉の小田原征伐に伴う北条氏の滅亡により、旧領には徳川氏が入封した。関東の徳川領の周囲には、常陸の佐竹氏・下野の宇都宮氏などの有力大名がおり、こうした勢力に対する北辺の守りとして、箕輪城には井伊直政（12万石）が、そして館林城には榊原康政（10万石）が配された。榊原氏の治世は康政・康勝・忠次と3代にわたり、関東一円の土木事業の一環として河川の改修や新田の開発などを推進した。やはり古記録によるものであるが近世館林城としての本格的な整備はこの榊原時代と言われている。

近世館林城主は、榊原氏以降中絶期をふくめ7家17代にわたる。

榊原氏につぐ館林城主は松平（大給）氏であり、江戸幕府の諸制度の整備に伴い城の価値づけは戦略的要素が失われ、序々に政治的なものへと移ったものと考えられている。

松平氏の後城主になったのは、徳川綱吉である。城主時代は20年にわたり、「金三万両」による館林城の改修事業に着手したと伝えられているが、後述する破城によるにより遡ることができない。

延宝８年（1680）綱吉の将軍職就任により、城主は綱吉の子徳松が継いだが僅か３年で病没した。このため館林城は廃城となり、天和３年（1683）破城工事が行われた。

この後、館林は幕府の直轄地として代官支配となり、24年後の宝永４年（1707）６代将軍家宣の弟清武が館林を拝領して再び館林藩は成立した。清武は松平（越智）を名乗り、破却されていた城の再築に着手した。古記録に記されるところによれば幕府より五千両の再建費用の補助があったというが工事の内容は不詳である。この松平（越智）氏の後太田氏・井上氏・秋元氏と譜代大名の藩政時代へと続き、館林城は領内の政治・文化の中核となり、城としての機能は形式化し明治維新を迎えた。

《焼　　失》

慶応３年（1867）徳川幕府は倒れ、明治４年（1871）の廃藩に伴い館林藩は消滅、同７年館林城は大火により、主要な建物は焼失した。火災を免れた建物も明治８年から10年にかけて民間に払い下げられ、学校建築などに伴い破却された。

《城　　跡》

福田啓作著の『館林尾曳城誌』（昭和16年刊行）「第二編後の館林城第六、城址の現状」の中で、工場や学校用地として利用された城跡の現状（昭和16年当時）が記されているので同資料を基に本丸跡地の状況を述べたい。

本丸・二の丸・南廓の跡地は土塁を崩し堀を埋め立てて共立モスリン会社の敷地として利用された。本丸跡地はこの工場遊園地として庭園的設計が施され、従業員の運動場に充てられた。四周の土塁は崩壊されたが部分的に往時を窺わせる様に残されていた。

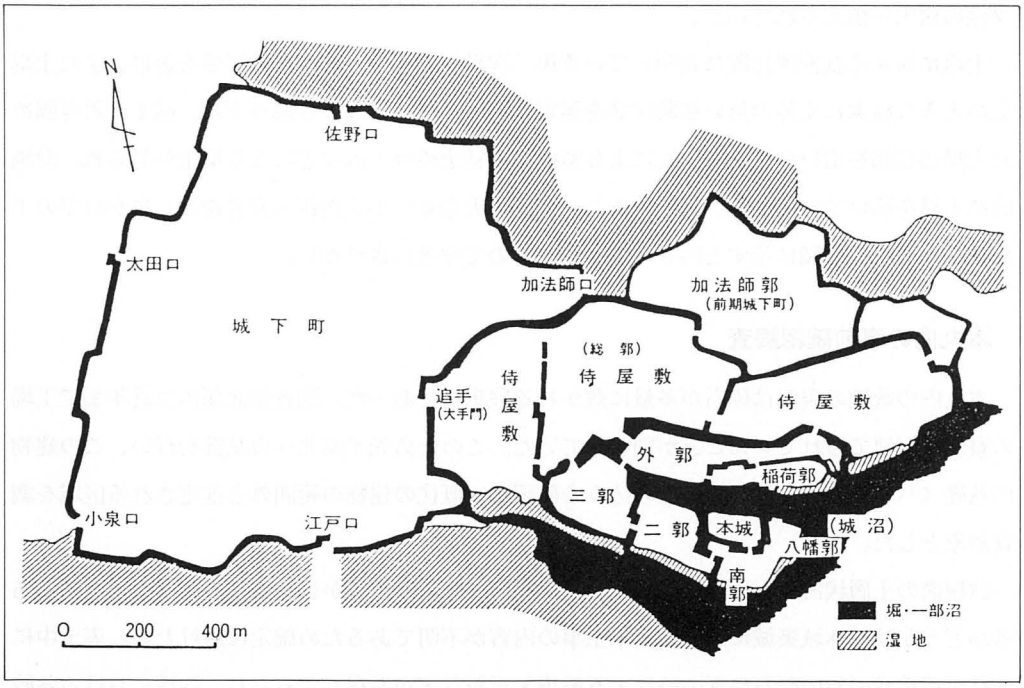
戦後は神戸生糸株式会社の敷地となり工場の寮などの建物が立ち並んだが、工場の縮小により市有地となった。調査前の状況は南側の土塁の一部が遺り、土塁の北側は駐車場となり砕石が敷き込まれていた。

《基礎資料にみる本丸の建築物》

近世館林藩の歴代城主の顔触れは、いずれも徳川家一門・譜代の大名であり、石高は少ないが幕府の要職に就任している。幕政参画に深く関与した大名の国替は宿命とも言え、近世館林城の城廓部分の様子を探るための資料の所在は殆ど明らかにされていない。絵図面については秋元家在城時の城廓図（『上野国館林城絵図』館林市立資料館蔵）等があり江戸時代末期に隅櫓などが存在したことが窺えるが、その他の建造物は描かれていない。

区分	中世				近世								近代
世紀	14	15			16			17			18		19
領主		赤井氏	長尾氏	北条氏	榊原氏	松平氏	徳川氏	無城	松平氏	太田氏	松平氏	井上氏	秋元氏	廃城
価値		戦術上		戦略上		政治上			政治・経済上				歴史上
備考	文書等による築城期（一四七〇）	伝説による築城期（一五三二）	長尾氏による城拡張（一五七〇）		榊原氏による城拡張（一五九〇）		徳川綱吉による改修（一六六一）	松平氏による城再建（一七〇七）					

第1表　館林城略年表



第7図　館林城・城下町地割概略図
（江戸時代末期）

調査に至る経過

館林城跡の調査は、本丸跡地を中心とする「歴史の森」整備事業に伴う子ども科学館(仮称)建設工事を原因とする事前確認調査である。

この整備事業は、周辺の縄文邑・館林市第二資料館・田山花袋記念館と建設予定の子ども科学館（仮称）とともに本丸跡に遺る土塁・八幡宮を歴史的・文化的景観の中で活用を図ろうとするものでもある。

文化財の取り扱いとしては、本丸跡地が前述のように明治７年の焼失以後、民間へ払い下げられ公園や工場の寮・駐車場などとして幾度もの開発が行われていることから、遺跡としては破壊されていることが予想された。このため記録保存を目的とした本格的な調査を実施する前に、試掘溝による確認調査を実施し遺跡の破壊状況や遺構の存否を把握しそれを基に再度検討するものとした。

土塁の事前確認調査

現存する土塁は秋元時代の絵図面本丸の南のものとされるが著しい人工的な土地改変の様子を呈していた。調査地南西部には工場の遊園地時代の池跡となっていて往時の土塁の形跡は全く無い。この池の東には駐車場となっている区域より比高＋４ｍの高まりが遺っておりアカマツ他の樹木が植えられていた。

土塁に対する試掘溝は既に判明している第二次世界大戦中の防空濠の区域を避け、また土塁上の大きな樹木に支障の無い横断区域を選定し、バックホーにより掘り下げ、粘土で着き固めた土塁の芯部を追いかけた。これにより断面には粘土やロームなどによる築土が見られ、計画的に土塁を築いている状況が確認できた。外側（犬走り）から内側（武者走り）にかけての土塁芯部の形状を略図に示すと図９の通りであるので参考にされたい。

本丸内の事前確認調査

本丸内の敷地の現況は砕石が多量に敷かれる駐車場であった。調査地北部には近年まで工場の寮２棟が建てられていたことが判明していた。このため先ず南北への試掘を行い、この建物の基礎（パイル）と北側の堀の落ち込みを確認し、既往の建物の範囲外と推定される区域を調査対象とした。

試掘溝の土層状況は、約50㎝でローム層が露出した。この層が自然地形のいわゆる地山であるかどうかは館林城築城における土木工事の内容が不明であるため確定は避けたい。表土中には駐車場造成の為の砕石や瓦の破片・五輪塔・玉石などが混在してみられ、同地における各時代の地表が一番最後の造成により破壊されてしまったものと判断された。

任意の試掘溝により確認された遺構は総て、ローム層を掘り込んだ形で造られたものであった。内容は井戸と推定される掘り込み４、石組の遺構２である。

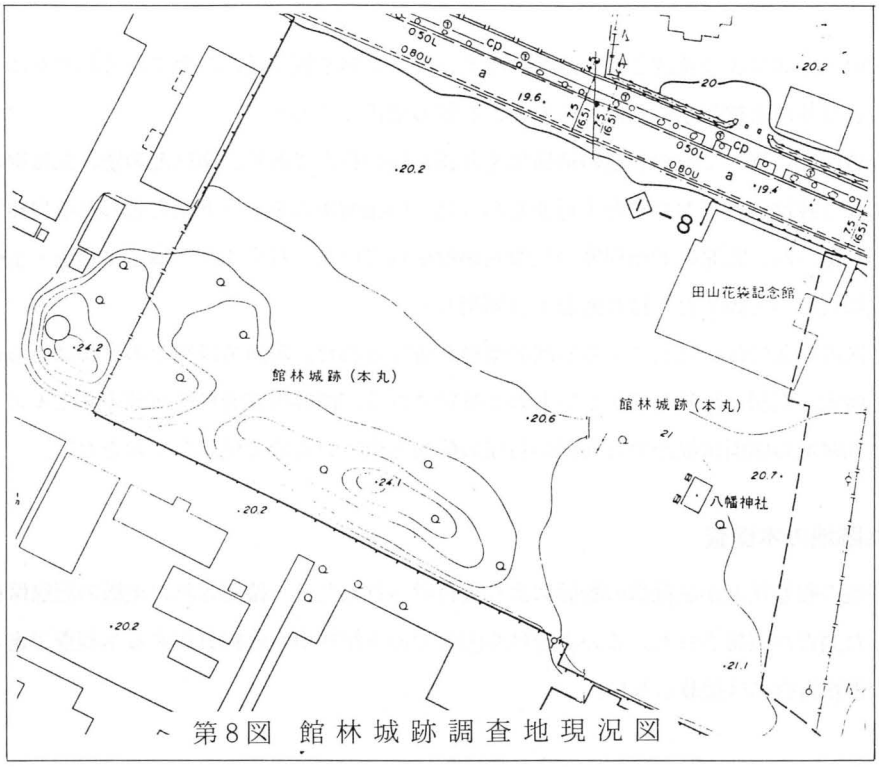
調査地西部に遺っていた石組の遺構は南北18ｍ程の長さであり、南は池の跡、北は寮の基礎工事により破壊されており調査不可能であった。80cm前後のチャート系と思われる自然石などが側部に配され、底部に30cm程度の川原石が敷かれていた（写真４）。構造は粘土・土を何層も交互にたたいて固めた形跡が断面より判明した。

調査区の西北では、切石による石組の遺構が確認された。断面には築土の形跡は見られなかった。前記の石組と比較して新しいものと推定される。館林市立資料館所蔵の共立モスリン時代の本丸跡地の図面に描かれた北側の石組の配列と似ているので付記しておきたい。

本丸跡地の本調査

調査地の破壊状況が試掘溝の断面により裏付けられたため、確認された遺構の記録保存を目的とした調査が実施された。この調査は原因者である館林市が経費負担する本調査であるためこの調査報告書には掲載しない。

写真10　館林城跡（本丸跡地）調査前の風景



第8図　館林城跡調査地現況図

写真11　館林城跡調査風景①

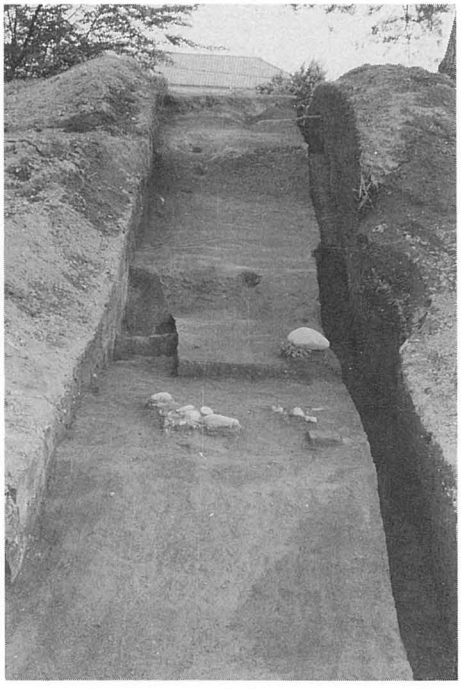
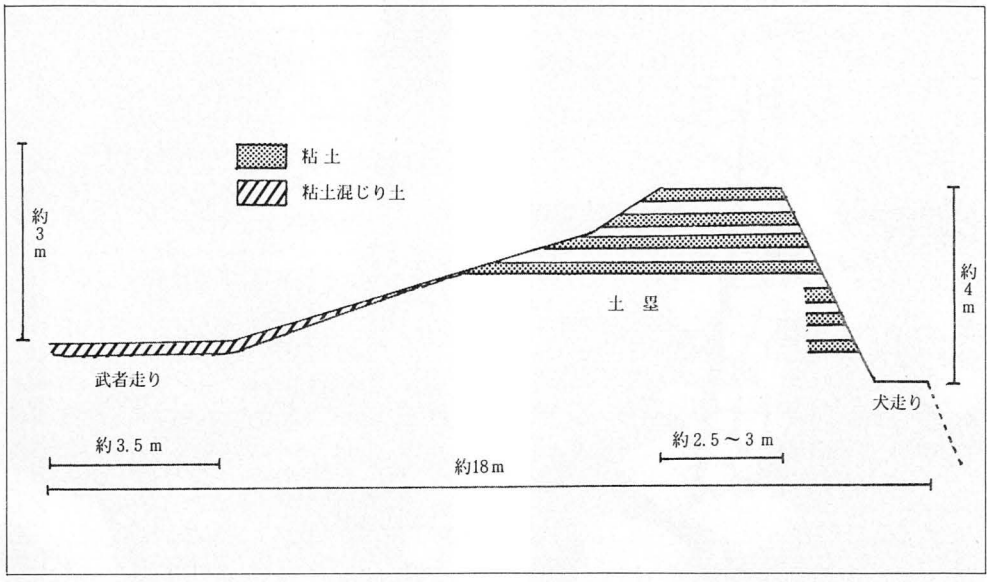


写真12　館林城跡土塁トレンチ全景



第9図　土塁構造概略図

写真13　館林城跡調査風景 ②

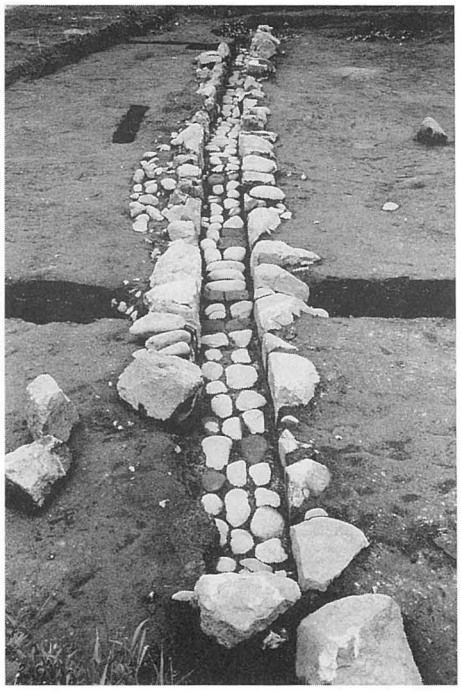
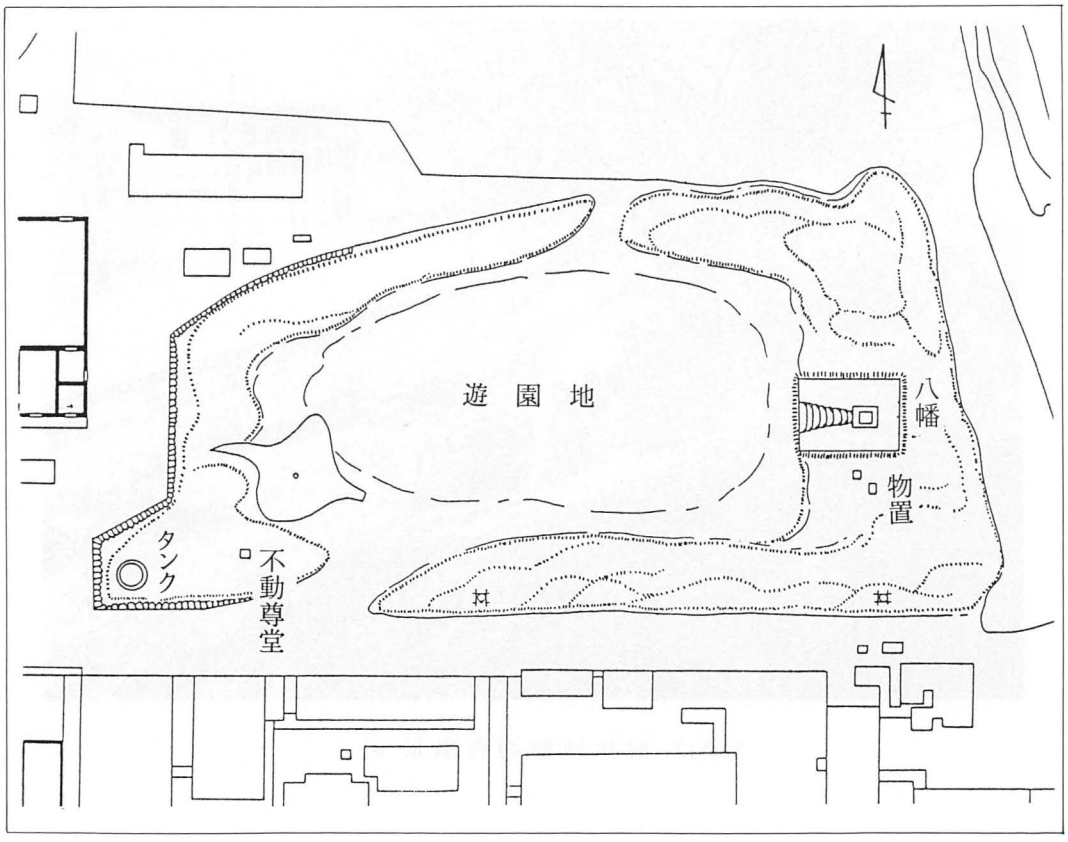
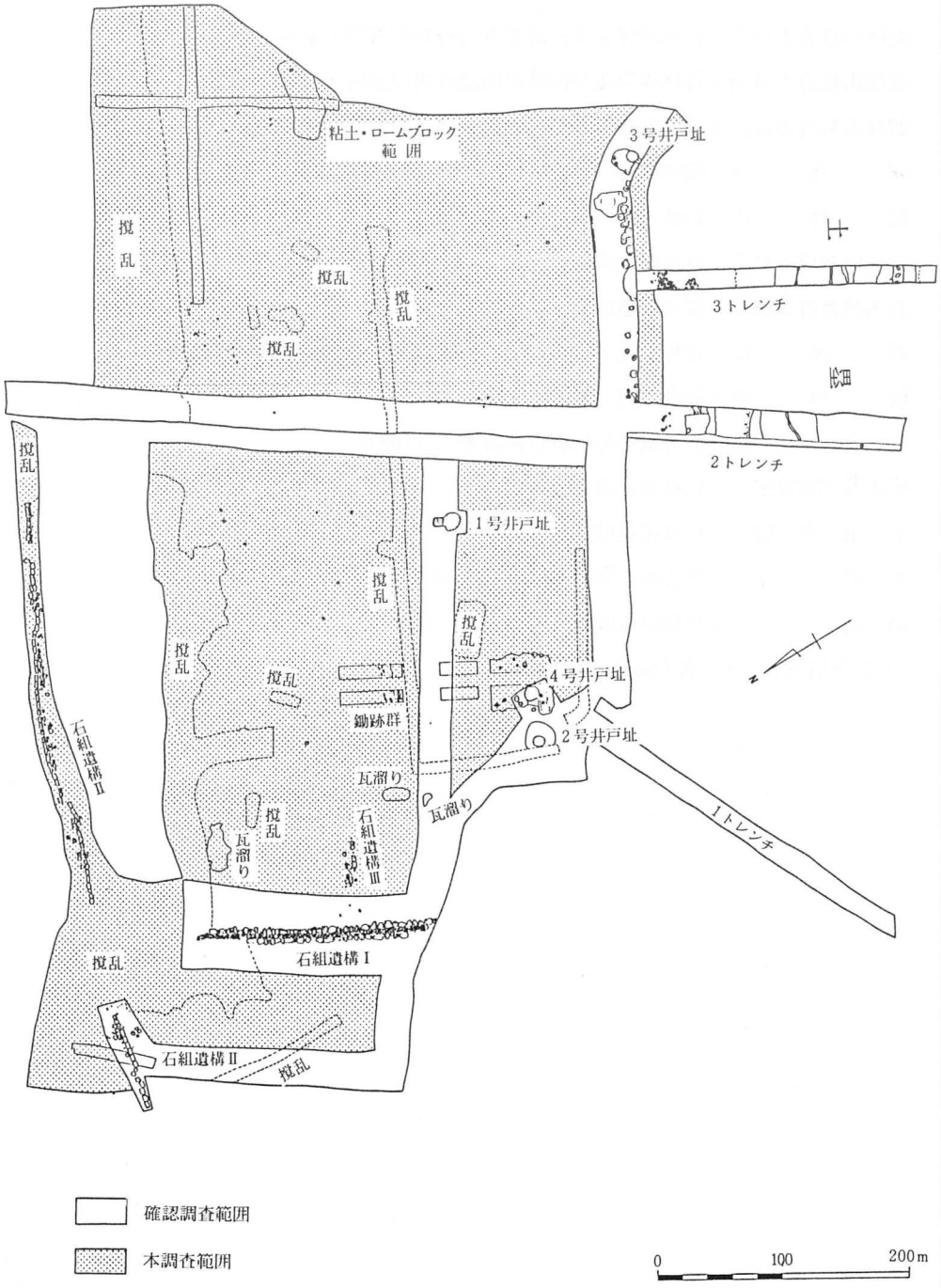


写真14　石組遺構Ⅰ

写真15　石組遺構Ⅱ



第10図　共立モスリン時代の本丸跡地
（トレースによる略図）



第11図　館林城跡遺構配置図

参　考　文　献

館林市教育委員会『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第１集～第20集』

館林市教育委員会『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第２集』（1986）

館林市数育委員会『城下町その歴史―近世館林藩の大名―』（1988）

館　　林　　市『館林市誌　自然篇』（1966）

館　　林　　市『館林市誌　歴史篇』（1969）

群馬県教育委員会『群馬県の遺跡』（1963）

群馬県教育委員会『群馬県遺跡台帳　東毛編』（1971）

群　　馬　　県『群馬県史　資料編２　原始古代２　弥生・土師』（1986）

板　　倉　　町『板倉町史　通史　上巻』（1985）

㈱　小　川　屋『八方遺跡発掘調査報告書』（1983）

館林市立図書館　『館林双書第１巻～第17巻』

福　田　啓　作　『館林尾曳城誌』（1941）

布　川　　了　『城と城下町の起原』（1989）

山　崎　　一　『群馬県古城塁址の研究』（1978）

『上毛古墳総覧』・『館林記』その他

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第21集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発　　行　館林市教育委員会
印刷所　中塚印刷所
発行年月日　平成2年3月31日

文化財愛護シンボルマーク

ふる郷の文化と歴史を見なおそう